
トライアングル ライン

愛田美月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トライアングル ライン

【Zコード】

Z0014E

【作者名】

愛田美月

【あらすじ】

シャツフル企画・（キャラクター設定担当者柚木なぎさ先生）
(ストーリー担当者愛田美月) *** 海野藍子と柴崎月乃、渡邊か
おるは幼馴染。いつも一緒に過ごしてきた三人。そんな三人に大きな
変化が起こる。それは月乃のあの一言から始まった***

「不味い」

渡されたコーヒーを一口飲んで、海野藍子は吐き捨てるように呟いた。

藍子と同じ薬学部に在籍している井沢智樹は、そんな藍子の反応に苦笑いを浮かべてみせる。

「藍子さん。学食のコーヒーに期待しちゃダメだつて。そりや、藍子さんは喫茶店でバイトしてるので、コーヒーの味にうるさいのかも知れないけどさ」

智樹はそう言つたが、喫茶店でバイトをしているからといって、コーヒーの味にうるさいわけではない。ただ単に、ぬるいから不味いと言つたのだ。藍子の好みは熱いコーヒーである。まあ、奢つてもらつておいて、礼より先に言つせりふではないか。そう思つたが、藍子は口にださなかつた。

前に落ちかかってきた長い黒髪を後ろへはらつと、智樹を睨む。「ところで、何であなたがここにいる訳? 私、人と待ち合わせててるつて、わざわざ言つたわよね」

「聞いたけど?」

にこにこと笑いながら智樹が首を傾げた。それが何か? とでも言つたげだ。

智樹とはこの大学に入学してからの腐れ縁だ。智樹と一緒にいると、どうも調子が狂う。

藍子はイライラしてきた。テーブルを人差し指で叩きながら、口を開く。

「聞いたけど? ジゃないわよ。聞いてたら普通、どうか行くでし

よ。あんたには遠慮つてもんじゃないわよね。前から思つてたけど、わざと冷たい表情を作つて言つてやつたが、智樹は悪びれた風もなく、笑顔を崩す事もなかつた。

「あはは。藍子さんつて怒つた表情も綺麗だよね。僕好きだなー」「ふざけないで！」

我慢の限界。藍子はテーブルを思い切り叩いた。振動でテーブルが揺れる。テーブルの上に置いていた紙コップは、幸いにも倒れなかつた。

一瞬驚きの表情をした智樹だが、ふと何かに気づいたように、眼鏡の奥の瞳を見開き、次いで指で藍子の後ろを示した。

勢いで怒つた表情をしたまま振り向いた藍子の目に、女性の姿が映る。

大きな瞳に小作りの鼻。ふくよかな唇。それらが全て、絶妙なバランスで配置された顔。肩まで伸びた茶色の髪が、彼女の優しげな雰囲気をよりいつそうひきたてている。

しばらく驚いた顔で、藍子を見つめていた女性は、その優しげな容貌を裏切る事のない、可愛らしい声音で藍子に話しかけた。

「藍ちゃん。何を怒つてるの？ 悪い顔して。せっかくの美人が台無しよ」

「……月乃」

藍子は女性の名を呼んだ。

女性、柴崎月乃是この大学の医学部に在籍している。藍子とは小学生の頃からの付き合いだ。

藍子が表情を和らげると、それに安心したのか、月乃是微笑んだ。その後、藍子の背後で、席についている智樹を見つけて声をかける。

「あら？ えーっと、井内さんだったかしら？ ここにちは

「ここにちは月乃さん。でも、井内じゃなくて、井沢です」

「あら。それはどうも失礼しました、井沢さん。ねえ、藍ちゃん。

井沢さんと密会中だつたの？」

月乃の問いに、藍子は溜息をついた。何だか妙に疲れた気分だ。

「月乃。密会つて……。あのねえ。密会つていうのは、ひそかに会うことを言つて。」この人の多い学食の中で、どうやって密会できるつていうのよ。まったく、妙なこと言わないでよね

藍子がそう言つと、なぜか月乃と智樹は顔を見合せた。

「藍ちゃんって、理系のくせにそういう妙にこまかいわよね」「ううう。妙にこまかいよね」

月乃に同意する智樹の頬を、藍子は無言でつまみ上げた。

「イテテテー」

痛そうに顔をゆがめる智樹を見て、少しだけすつきりした藍子は、智樹の頬をつまんでいた指を離す。

藍子の指から開放された智樹は、少し涙目になりながら、眼鏡の奥から恨めしげに藍子を見た。

「暴力反対」

そう訴えた智樹に、藍子は月乃に席へつづき促してから言つた。

「田には田を。歯には歯を」

「藍ちゃん。それ違うと思う」

藍子の隣の席についた月乃は、律儀につづこんだ。

「あはははは」

月乃のつっこみに笑い声を上げた智樹の足を、藍子は思い切り踏みつけた。

「痛つ」

痛みに驚いて足を上げた智樹は、膝をテーブルに強打した。辺りに大きな音が響く。何事かと近くにいた者たちが智樹を見る。いい気味だと、藍子は思つた。

膝を抱えて呻いている智樹に、月乃が声をかける。

「大丈夫ですか？ 井内さん」

「い、井沢です。月乃さん。大丈夫です」

「ふんつ。田じるの行いが悪いからそういうことになるのよ。ほり、さつさとどつか行きなさいよね。月乃と話しがあるんだから」

追い立てるようになつて、藍子は智樹に向かつて、しつしつと手を振る。

「藍ちゃん。それは可哀相よ。私はいつ……じゃない、井沢さんが
いても構わないわよ」

「ほりー、月乃さんは良いって言つてるよ、藍子さん。それに、次
の実習また一緒に実験室行こうよ」

「けつ」

藍子は不満げに吐き捨てた。だが、内心少しはまつとしていた。
最近、月乃と二人きりになることが怖いのだ。自分の心の奥にし
まいこんだ思いが、ばれてしまうような気がして。

絶対にばれてはいけない思いを封印したまま、月乃のそばにいる
ことが、少し苦痛なのだ。

「……で？ 今日はどうしたの？ 私に話しがあるって言つてたわ
よね」

藍子は月乃に話を向けた。

昨夜、月乃から電話がかかってきたのだ。話したいことがあるか
ら、明日学食で待ち合わせしましょうと。

最近、互いに学業が忙しく、同じ大学内にいても、顔をあわせる
事はめったになかった。

否、それは建前だ。

確かに学業は忙しかったが、会おうと思えば、今日のようになつ
ことは出来た。

藍子は避けていたのだ。月乃のことを。それが月乃にばれたのか
と思い、内心ひどく焦つて、昨夜は余り眠れなかつた。

月乃は表情を正して、藍子を見る。藍子はじつと月乃を見つめた。
「実は、これ、かおる君に渡して欲しいの」

そう言って、月乃は持つていた鞄から何かを取り出す。それは月
乃に不似合いの、青いハンカチだつた。男物だろう。そのハンカチ
は綺麗にアイロンがかけられていた。

月乃に差し出され、藍子は無意識にハンカチを受け取つた。

「これを、かおるに？ って、私が渡さなくとも、月乃が直接渡せ
ば良いじゃない。かおると付き合つてるのは月乃なんだから」

藍子は月乃の目を見ることが出来ず、ハンカチに目を落としたままそう口にだした。

「それが、無理なの。しばらく実習で忙しくて、いつデータできるか分からぬから。」この間汚したハンカチ、洗ったから返すって、かおる君に伝えてね。今日、バイト先で会う? かおる君と

月乃がそこまで言つた時、智樹が手を上げた。

「はい、質問」

「何ですか? いつ……じゃない、井沢さん」

「……月乃さん。早く名前覚えてくださいね。えっと、話を戻すけど、かおる君って一体誰? 可愛い名前だけど、男性だよね」

智樹の問いに、月乃と藍子は顔を見合せた。

「ああ、知らなかつたつけ? 私とかあると月乃は幼馴染なの。そして、かおるは月乃の彼氏でもあるって訳」

「ええ! やつぱり月乃さん、彼氏いたんですね。残念だなあ。非常に残念だ」

「あんたが残念がる意味が分からないわ

「あら? 井沢さんは、藍ちゃんが好きなんですよね」

無垢な笑顔で、月乃は智樹に問う。智樹はわざとらしく胸を押さえるマネをした。

「ストレートですね。結構きましたよ。今の攻撃」

「え? 私は何もしてないわよね。藍ちゃん」

「月乃。こんなバ力に付き合う事ないから。だから言つたでしょう。さつさとどりか行つてもらえばよかつたのよ」

藍子が半眼で智樹を睨んでみせると、智樹は苦笑いを浮かべた。

「もう、藍子さんはきつついよなー。そういうところも好きだけど、眼鏡の奥の瞳を細めて笑う智樹は、それなりに整つた顔立ちをしている。実際智樹はもてるのだ。だが、そんな事、藍子には関係なかつた。

「そう言つ発言するから、誤解を招くのよ。この間も、井沢さんと

付き合つてるつて本当ですかって、後輩に聞かれたんだから。」
ちはいい迷惑だつていうの」

藍子の発言に、月乃是不思議そうな顔になる。

「何が誤解なの？」

月乃が尋ねると、藍子は月乃に向き直り、口を開いた。

「いい、月乃。あんたには、かかるがいるから大丈夫だと思うけど。
こいつはただの変人だから。どういう訳か、私の顔が気に入つたつ
てだけで、ずっと付きまとつてゐるよ。こいつは私に恋愛感情な
んて全くもつてやしないんだから。こいつにとつては、顔が好みか
好みじゃないかが重要つてだけなの」

そう言つて、また睨んでやつたら、智樹は相変わらず笑顔で反論
をよこした。

「失敬だな。顔だけじゃないよ。性格も氣に入つてゐるよ。でも、
月乃さんの顔も好きだなあ、僕は。月乃さんは藍子さんと違つて誰
にでも優しいし、医学部のマドンナだからね。こいつやつて、お二人
の姿を正面から拝見できる僕は幸せモノであります」

智樹の発言に、藍子と月乃是顔を見合させた。しばらく無言だと、
周りの音が大きく聞えてくるような気がするから不思議だ。

藍子は月乃から、智樹に視線を戻し、言つた。

「キモつ」

「藍ちゃんそれは可哀相よ。せめて、気持ち悪いつてちやんと言つ
てあげなきや」

月乃是慌てたように、藍子の肩に手を置いた。智樹は眼鏡を指で
押し上げて、口を開く。

「月乃さん。どちらにしろ意味は一緒だから」

むしろ、月乃の方が酷くないか？と思ふ藍子だった。

何となく気まずい雰囲気に陥つてしまつた。藍子は話を逸らすべ
く、一口飲んだまま放置していたコーヒーを手に取つた。

「はい、月乃。コレあげるわ。コイツに奢つてもらつたんだけど、
私ぬるいの苦手なのよね。月乃、猫舌だから飲めるでしょ」

月乃に紙コップを差し出すと、月乃は嬉しそうに紙コップを手に取つた。

「あ、いいの？ ありがとう。実は喉渴いてたの」

「お金出したのは、コイツだから」

そう言つて、智樹を指差した。智樹は胸を張る。本当にバカだと藍子は思つた。

「そういうえば、月乃。あなたちゃんと薬飲んでるの？ お昼食べてないなら、さつさと食事して薬飲まなきや」

ふと、思いついて藍子は言つた。月乃是、口につけていた紙コップを下して、藍子を見る。

「心配性だなあ、藍ちゃんは。食事はしたし、薬もちゃんと飲んだから」

「本当に？」

二人の会話をじつと聞いていた智樹が、またもや手を上げて二人の注意をひいた。

「はい、質問」

「今度は何よ」

間髪入れずに藍子が問つ。智樹は藍子と月乃を見比べる。

「えつと。薬つて何のこと？ 月乃さん。風邪かなんか引いてるの？」

？」

智樹の問いに、またも二人は顔を見合させた。二人の顔が曇る。

月乃是、淡く微笑んでから、口を開いた。

「私、小さい時から病気にかかりついて、毎日薬を飲まなきゃならないのよ。あ、でも安心して。人に感染するものではないから」

智樹は、月乃の話を聞きながら、なんともいえない顔を作る。そんな顔するなら、はじめから聞かなければよいのに。

「ゴメン、月乃。私達そろそろ行かないと。コレ、ちゃんとかかるるに渡しておくから」

月乃にハンカチを示して、藍子は立ち上がった。ほり、さつさと

行くわよと、藍子は智樹の頭を叩く。

「痛い、藍子さんは本当に乱暴なんだから」

文句を言つ智樹を、藍子は急き立てる。

「あ、頑張つてね。藍ちゃん、こいつ、じやなかつた。井沢さんも、藍子と智樹は月乃に見送られ、食堂を後にした。

月乃と手を振つて別れた後、実験室へ向かうために、藍子と智樹は並んで行き交う人の少ない廊下を歩いていた。

しばらく無言で歩いていたが、智樹が藍子に呼びかけた。

「あの、藍子さん」

「何よ」

藍子の声は冷たい。だが、それはいつものことなので、智樹は続けた。

「月乃さんの病氣つて、治らないものなの？」

「……」

「ねえ、藍子さ……」

返事をしない藍子にもう一度呼びかけたとき、藍子は不意に立ち止まつた。一、二歩先まで進んで、智樹も立ち止まる。

藍子は溜息をついて口を開いた。

「さつき、本人に聞けばよかつたじゃない」

もう言つて恨めしげに智樹を見る。智樹も溜息をついた。

「よく言つよ。話しが途中で遮つたの、藍子さんじやないか」

智樹が言つと、藍子は智樹から目を逸らした。

「まあ、いいか。月乃別に隠してないし」

「じゃあ、教えてよ」

智樹がそう言つたのを機に、一人はまた歩き出した。

「あの子の病氣は、スポーツドロームつてこいつの」

藍子が言つと、智樹は眉を寄せた。

「スポット、何？」

「スポットシンドローム。まあ、あれよ。スポットっていうのは痣の意味ね。月乃の身体は、突然痣が浮きでる。痣だけじゃなくて、突然発疹がでたり、かぶれたり」

「なんだ。アレルギーみたいなものか。別に、余命が少ないような病気じやないんだね」

智樹の言葉に、藍子は顔を顰めた。立ち止まり、智樹を睨む。

「なんだって、何よ。発作が起きたら、それは苦しむのよ。痣が浮き出るとき、かなり痛い思いするんだから。その痛みで死んでしまう人だつているのに。それをなんだつて何よ」

藍子は悲痛な表情を浮かべていた。智樹は驚いて藍子を見つめる。「月乃が苦しんでいる姿を見たこともないくせに。簡単に言わないで」

藍子の大きな声が廊下に響き渡る。

「ごめん、藍子さん。僕が悪かった、軽率だつたよ。謝るから落ち着いて」

智樹は大声を上げた藍子の両肩に手を置いて、藍子をなだめる。藍子は智樹から視線を外し、下を向いてしまった。

近くを歩いていた人が驚いてこちらを見ている。それに何でもないと言つようじにジェスチャーし、智樹は藍子を見下ろした。

藍子が俯けていた顔を上げる。いつもの勝気な藍子の顔に戻つていた。藍子は、肩に乗つていた智樹の腕を払いのける。

「勝手に触るなんて十年早いわよ」

そう言つて藍子は踵を返した。智樹は藍子の背に慌てて声をかける。

「ちょっと、藍子さん。そつちは実験室とは逆方向」

「やめた」

「は？」

聞き返した智樹を振り返りもせず、藍子は言つ。

「行くのやめた。貧血で倒れましたって、教授に言つといて」

藍子はそれだけ言つと、後ろで藍子を呼ぶ智樹の声を無視して歩き続ける。

智樹は、藍子を追つては来なかつた。

大学を後にして、藍子はようやく立ち止まる。

智樹のせいで嫌な事を思い出してしまつた。

ただでさえ、気分が沈んでいる時に、これはたまらなかつた。

藍子は思い出してしまつた映像を、頭を振つて追い払おうとした。しかし、一度思い出した映像は、容易に消せるものではなかつた。

2

小学四年生の、夏の夜。

藍子とかあると月乃は、小さな冒険へくりだした。

近所にある高台の公園に、三人で出かける。そんな簡単なこと。だが、小学生の三人にとつては、夜、親に内緒で家を抜け出すだけでも、それは立派に冒険心をくすぐるものだつた。

街を見下ろす位置にある公園は、夜景も綺麗で、近所ではデートスポットとしても有名だ。しかし、藍子たちの目的は夜景ではなく、星空だつた。月乃が星好きで、一度、ここから夜空を見てみたいと言つたのだ。

それならばと、藍子とかあるが計画を立て、冒険を決行したのである。

その日はとても澄んだ夜空で、たくさんの星が瞬いていたのを、今でもはっきりと憶えている。三人はカッフルのいないベンチを見つけてそこに腰を下した。眼下には夜景が広がつてゐる。だが、それよりも藍子は夜空に瞬く星の方が綺麗だと思つた。

『ちよろこよな』

うーんと伸びをして、三人の中では唯一の男の子である渡邊があるが言った。

『ちゅうりつて？』

月乃は、かおるが言つた言葉の意味が、分からぬようだつた。月乃に見つめられ、かおるは困った顔をした。短い髪を乱すように頭をかく。

『え？　えーと、あれだよ。なあ、藍子。なんて言つたらいい？』

『簡単だつてことだしょ』

話しを振られ、藍子は夜空から、友人一人へと視線を戻した。

月乃はひどく真面目な顔で、なるほどと手を打つた。

それがなんだか可笑しくて、藍子とかおるは顔を見合させて笑う。なぜ笑われているのか分からぬ顔をしていた月乃も、つられて笑い出した。

笑いがおさまった後、三人はそろつて顔を上に向ける。

たくさん星が目に映る。

大好きな友達と並んで見る星空は、それは美しく、藍子の頭に残つている。

このまま綺麗な思い出で、終わつてくれればよかつたのに。

藍子はいつもそう思つ。

この後に起こつた出来事は、藍子にとって目を逸らしたい物でしかなかつたから。

アルバイト先の喫茶店へ向かう途中、藍子は道の端でうずくまっていた。智樹のせいで、色々と昔のことと思い出し、少し気分が悪くなつたのだ。

つい、へらへらと笑う智樹の顔を思い浮かべて、藍子は急に苛立ちを覚えた。

「あれ？ 藍子。おまえこんな所で何やつてんの」

聞きなれた声が、藍子に呼びかけた。藍子はしゃがみ込んだまま、ゆっくりと振り向く。

「……かおる」

そこには、藍子の思っていた通りの人物がいた。

藍子と円乃の幼馴染、渡邊かあるだ。百八十を越える長身。引き締まった体躯。かあるは、青いシャツとジーパンといへ、ラフな格好でその身を包んでこる。

なぜこんな所にかあるがいるのだらう。この時間はもうバイトをしているはずだ。そう思ったときに、気づいた。かあるの手には買い物袋が提げられている。大方、買出しの帰りなのだらう。

「おまえ、死にかけた酔っ払いみたいな顔してるぞ」

近くに寄つて来たかあるは、藍子の顔を覗きこんだ。藍子はかおるの足に、パンチをお見舞いする。口で反論する元気がなかつたのだ。

「痛つてーな。凶暴女」

「……さやあさやあ喚かないでよ。かあるちゃん」

藍子はわざと、ちやんを強調して言つ。かあるが、自分の名前にコンプレックスがあることを知つていてから、わざとやつ言つたのだ。

「ちやん言つなつていいつも言つてんだらう。藍子。ほり、手を出せよ。いつまでもそんな所に座り込んでたら、通行の邪魔だから」差し出された大きな手を、藍子は躊躇いながら取る。強い力で手が引っ張られたかと思うと、いつの間にか立ち上がつていた。

「……どうも」

藍子はかあるの顔を見ずに、礼を言つ。

かあるは端整な顔に、仏頂面をつくつた。

「可愛くねえの」

「悪かつたわね。どうせあなたの大事な円乃より、可愛くなんてなれませんよーだ」

そう言って、今だかあるに握られていた手を引き抜く。かあるが

眉を寄せた。

「誰もそんなこと言つてねえだろ。バーカ」

「バカって言つたほうが、バカ」

「何だよ。バカ」

「うつさいバカ」

二人は歩きながら、互いを罵り合つ。これが昔からの、藍子とかおるの付き合い方だつた。

結局、一人の言い争いはバイト先の喫茶店まで続いた。
三階建ての雑居ビルに、その喫茶店はある。

『喫茶コキア』という名前の喫茶店が、一人のアルバイト先だつた。
一人は裏口から中に入る。藍子は長い髪を後ろで一つに結わえ、制服に着替えると、狭い厨房に入った。

「おはようございます。マスター」

たまたま厨房に顔を出していたのだろう。大抵、店内のカウンターにいるマスターが、厨房にいた。

「おはよう。海野さん。今日暇だよー」

笑いながら、笑えないことをマスターが言つ。相変わらず能天気な人だ。

いつも笑つたような細い目をしたマスターと藍子は、高校生の頃からの付き合いだ。

最初は客と店員として知り合い、後にバイトと雇い主という関係になつた。

「今日はアキさんいないんですか？」

アキさんは、藍子よりも年下の、マスターの新妻で、たまにこの店で手伝いをしている。今日は姿が見当たらない。もしかしたら店の方へ出ているのかもしれないが、そんな気配もなさそうだ。

「うん。今日は検診があるからお休み」

マスターは細い目をさりげに細めて幸せそうな顔をする。マスターの若い新妻は、現在妊娠中だ。

「おー、藍子。くつちやべつてないで、早く店内行けよ。客が帰るぞ。椅子の音がした」

かあるが、食器を洗いながら藍子に声をかける。水を流しながら、よく椅子の音を聞き取れるものだ。地獄耳だと、藍子は呆れた。

「分かってますよーだ」

藍子は、見ていないので承知で、かあるに向かつて舌を出す。藍子は踵を返して店内へ向かつ。一度溜息をついてから、ぐっと腹に力を入れる。

これから仕事だ。接客は笑顔が大事。そう自分に言い聞かせる。そして、藍子はレジの前に立つ客に向かつて、営業スマイルを浮かべた。

3

「お疲れさんっしたー」

「お疲れ様です」

閉店作業を終えたあと、藍子はかあるとじりつて、店を出た。

藍子とかあるの家は近い。近すぎると言つてもいい。かあるの家は藍子の家の向かいにあつた。

そのせいで、一緒に帰りたくないても、一緒に帰るしかなくなるのだ。

藍子は、今日何度も分からぬ溜息をつく。

「はーあ」

「でつかい溜息だな。幸せ逃げるぞ。今のうちに吸つとけよ

「はあ？ 吸うつて何よ」

「よく言つだる。溜息つくと幸せが逃げるから、すぐに出てつた幸

せを吸い込めつて。そうすりや、出でつた幸せがまた元に戻るつて

さ

「言わないわよ。つていうか初めて聞いた。そんなの」

藍子は街灯のおかげで、夜道でも良く見えるかおるの顔を見上げた。

かおるは笑顔だ。

「何笑つてんのよ」

藍子はなぜか急に恥ずかしくなつて、かおるから、視線を外した。「いやー、最近まともにお前と話してなかつたからさ。なんか、まあ、ぶっちゃけ嬉しそうつかさ」

「何よそれ」

藍子は照れて赤くなつた顔を見せまいと、視線だけでなく、顔をかおるから背けた。

なぜそんな事を言い出すのだ。確かに最近、藍子はかおることも避けていた。月乃と同様に、バイトのシフトも出来るだけ、かおると被らないように調整していた。

それをもしかしたら、気づかれていたのかもしれない。

「最近、お前忙しいのか知んないけど、全然家にも顔ださねえしさ。月乃も言ってたぜ。最近藍ちゃんが遊んでくんねえって」

かおるの口から月乃の名が出た時、藍子は高調していた気分が一気に冷めていくのを感じた。

そして、ふと忘れていたことを思い出す。

「あ、そうよ。月乃。月乃からハンカチ預かつてたのよ。すっかり忘れてたわ」

そう言つて藍子は鞄の中から、青いハンカチを取り出す。そして、それをかおるに手渡した。

「ああ、コレ。別に返さなくてもいいって言つたのに」

「そんなの、月乃に直接言つてよ。私を介さないで」

藍子はかおるの口から、月乃の名が出るたびに、自分の心に暗く嫌な感情が生まれるのを感じる。

嫌だ。ダメだ。こんな感情。捨ててしまわなければ。

「だつて、なかなか会わねえもん」

「電話があるじゃない」

「あいつ、実習の時ケータイの電源切つてるし。この間しばりべたりから「ゴメンとか言われたし」

やめて、これ以上月乃の話しをしないで。藍子は、耳を塞ぎたくなる衝動に駆られる。

「一ヶ月前から付き合いだしたカップルとは思えない、冷めた状況ね」

心の中は大荒れなのに、藍子の口から出た言葉は、静かだった。

「ああ、まあな」

しばらく、沈黙が続いた。黙々と一人して家路を急ぐように歩く。ふと、横を歩いていたはずの気配がなくなつたことに、藍子は気づいた。立ち止まって、後ろを振り返る。かおるは五歩分ほど後ろに立っていた。街灯の下。何か思いつめた表情で、口を開く。

「なあ、藍子。俺……本当は」

「言わないで。言わなくていい。私達は、月乃を守るつて決めたの。誓つたでしょ、あの日」

藍子はかかるの言葉を遮つた。藍子は下を向いていた。そのため、かかるの表情は分からぬ。だが、聞きたくない言葉を、かかるが言おうとしていたことは分かる。だから遮つた。

「声がでけーよ。バカ」

囁くような、かかるの声。

かかるが近づいて来る気配がする。

「バカって言った方がバカよ。バカ」

藍子も同じように、小さな声で言った。

「いや、俺はお前の方がバカだと思うな」

その声に顔を上げて、藍子はかかるを見んだ。

「つむきー」

そう言って、隣に並んだかあるの背を平手で叩く。結構いい音が

した。

「痛いな。凶暴女」

「私に優しさを求めるないでくれる。月乃が十分優しくしてくれるでしょ」

藍子はそう言つと、前を向いて歩きだした。いつもと同じ帰り道を、かおると二人で。

4

『私、かおる君のこと、好きなの』

今から一ヶ月前。満開の桜の下で、お花見をしていた時のことだった。

月乃が、突然かおるに告白したのだ。藍子の目の前で。楽しいはずの、三人のお花見の席で。

かおるは呆けた顔で月乃を見つめ、藍子は絶句したまま月乃を見た。

二人から注目された月乃は、いつもと変わらぬ優しげな笑みを浮かべたまま、一人を見返した。

『もう一回言うね。私、かおる君のこと好きなの。私と付き合つてほしいの。かおる君。返事、聞かせてくれる?』

先に我に返つたのは、藍子だった。藍子は呆けたままのかおるの足を叩いた。一度、藍子を睨んだかおるだが、すぐに状況を思い出したのか、藍子に文句は言わなかつた。

『あ、えつと、その。何だ。あの、と、突然過ぎてだ。その、ビックリして。答え。後でもいいか?』

かおるは本当に驚いていたのだ。つつかえながら、そう口こだした。

藍子は、かおるがすぐに答えをださなかつた事に、幾分安堵した。

安堵してしまった自分が嫌だった。月乃がかかる好きならば、絶対に応援しなければならないのに。

『ねえ、月乃。あんた、本当にこんなのがいいわけ?』

それでも藍子は、月乃にそう聞いていた。そう聞いてしまっていだ。嘘ならばいいと、「冗談ならばいいのこと。微かな希望を胸に抱いて。だが、現実は違つた。

『うん』

恥ずかしそうに、頷く月乃。藍子は目の前が暗くなつたような錯覚に陥つた。

『わう、良いんじゃない。うん。かおるなら、月乃の病気に理解あるし。かおるほど、月乃の彼氏にぴったりなのつて、いないのかもしれない』

心とは裏腹に、口から勝手に言葉が飛び出す。そんなこと、本当は思つてもいないのに。

『本当? 藍ちゃん。本当にそう思つ?』

嬉しげな月乃の、可愛らしい声。

頷かなければならぬ。月乃のために。月乃を守るつて決めた、あの日の誓いを破らないために。

そう、自分に言い聞かせて。藍子は笑顔で、月乃に頷いてみせた。

藍子はわざとらしく眉間に皺を寄せた。バイト先で藍子がこういう表情をつくるのは珍しい。客もまばらな昼前の土曜日。目の前のカウンター席に座った客が、井沢智樹では、こうこうつ表情をつくりたくなるというものだ。

「……いらっしゃいます。」注文は?

「チヨコレートパフ」

藍子は注文を復唱した後、厨房に注文の品を告げる。

今、マスターはいない。早めのお昼休憩に出ていた。今、店内に

は、かおると藍子のほかに、テーブル席に座る一人の客と、藍子の前に座る智樹しかいない。

「藍子さん。その制服似あつてるね」

少しづれた眼鏡を元の位置に戻しながら、智樹はにやけた顔を藍子に向ける。

藍子は無視したい衝動に駆られながら、口を開いた。

「どうも」

「冷たいなー。僕と藍子さんの仲なのにー」

意味深な事を言うな。意味深なことを。しかも大声で。藍子はまた眉間に皺を刻んだ。

「お客様。変なことを言わないで下さい」

「嫌だなー。僕は変なことなんて言つてないよ。といひで藍子さん。あの人人が噂のかあるさんかな?」

言われて藍子は振り返った。厨房からチョコレートパフェを持つたかあるが顔を覗かせている。

自分の名前を言われて少し驚いたような顔をして、かおるは厨房から出てきた。大きな身体が藍子と並ぶ。

「おお、大きいですね。身長何センチ?」

「百八十五ですけど……」

そう言いながら、チョコレートパフェを智樹の前に置く。かおるは訝しい表情を作つて、藍子を見下ろした。

「藍子、こちらのお客様、知り合いで?」

小声で聞くあたり、一応氣を使つていろいろしき。やう思つて、藍子も小声で返す。

「うん。同じ学部の同級生」

「ふーん」

どこか不機嫌そうに見えるのは、藍子の氣のせいだらうか。かおるはチョコレートパフェを美味しそうに食べる眼鏡男を軽く見下ろした後、踵を返した。

「あ、ちょっと待つて。えーと。かおるさん」

「はい？」

智樹の呼びかけに、かおるは振り向く。智樹は女性好きのする笑顔を、かおるに向かた。

「僕は、井沢智樹って言います。藍子さんとは公私共にお世話をなつています」

智樹は座つたまま軽く頭を下げる。かおるも一応会釈を返すが、表情は先程よりもさらに不機嫌そつに見える。

「ただの友達だから」

別にしなくてもいい言い訳を、藍子はしてしまつ。

智樹は、藍子の言葉に眉を顰める。

「やだなー藍子さん。そう強調しなくてモー。藍子さん達は恋人どうしでも何でもないんでしょう?」

智樹の問いに、藍子は智樹を殴りたい衝動に駆られる。それを思いとどまつたのは、まだ客が他に一人いる事と、職場だといつ思いからだ。だが、拳は胸の前で握り締める。

不穏な空氣を感じ取つたのか、智樹は厨房の入り口の前で立ち止まつていたかおるに、視線を移す。

「かおるさんつて、月乃さんと付き合つているんでしきつ? 一度お目にかかりたかつたんだ」

場の空氣を読まない男、井沢智樹。藍子の脳裏にそんな言葉が過ぎる。

「渡邊

「へ?」

「俺の苗字。渡邊。かおるつて呼ばれるの嫌いなんだよ。だから、名前呼ぶときは渡邊つて呼んでくれる?」

かおるの言葉に、智樹は頷いた。

「分かつた。失礼。渡邊さん」

智樹が謝罪すると、頷いてかおるは厨房へ入つていった。
「無口な人だねえ。渡邊さん」

「そうでもないわよ。普段はどうちかつていうと、ひょうきんな方

よ。あんた嫌われたんじゃない？」

藍子が言うと、智樹は情けない顔を作る。

「えー。僕はまたやつてしまつたのかな」

「そつみたいね」

藍子は智樹の言葉に同意を示す。智樹は同姓の友人が極端に少ないので。だからこうして、構つてくれる藍子のそばに近づきたがる。それを許してしまつてはいる藍子も藍子だが。

「あ、そうそう。忘れるところだつた」

「何よ」

藍子が問うと、智樹はにんまりと笑つた。

「ダブルデートしようよ」

「はあ？」

藍子は思わず大声を上げてしまつた。一人の客が驚いた様にこちらを見る。

藍子は申し訳ありませんと、一人の客に頭を下げた。

「あんたのせいで、大声出しちゃつたじゃない。バカ」

「酷い、人のせいにするなんて。僕は大声を出して欲しいなんて、一言も言つてないよ」

藍子はカウンターに突つ伏したくなつた。

「で、話しを戻すけど。僕と藍子さん。渡邊さんと、月乃さん。この四人でダブルデートしようよ」

嬉しそうに、親指だけ曲げて四を作る智樹に、藍子は小声で詰め寄る。

「ちょっと、月乃とかおるはいいわよ。カップルだから。でも、どうして私とあんたなのよ。冗談じやないわ」

かあると月乃が仲睦まじく、寄り添う姿なんて見たくなり。内心そういう思いで、智樹の提案を拒否した藍子だったが、次の智樹の一言で、反論できなくなつた。

「月乃さんは了承済みだよ。久しぶりに日曜日は時間があるんだつて。楽しみにしてるつてさ、次の日曜日。川原公園へ遊びに行こう

月乃が了承済み。それならば、藍子は行かないとは言えない。月乃が楽しみにしているなら、その楽しみを藍子が奪う訳にはいかないのだ。藍子は月乃を守らなければならぬのだから。

5

日曜日。藍子はかかる、月乃、智樹と四人で、川原公園と呼ばれる場所へ来ていた。ちょっとした森の中にある公園だ。藍子の家から電車で一駅先にあるこの公園は、学校の遠足で何度も足を運んだことがある。藍子達にとっては、馴染みの場所だ。

公園といつても遊具があるわけではない。川原の近くに広場や遊歩道があるだけだ。夏になると、川遊びをする子どもや、広場でバーベキューをする人々などの姿が多く見受けられる。だが、五月の連休明けの日曜ともなると、人も少ない。

四人は川の近くで敷物を敷き、かあるが作つてきたお弁当を広げた。「じつじつとした石の上に敷物を敷いたので、座り心地はひどく悪い。

緩やかに吹き抜ける風が、緑と水の匂いを運んでくる。春の穏やかな日差しが降り注ぎ、とても気持ちがよい。

藍子の心とは裏腹に。

「わお。まさう。これ全部、渡邊さんが作つたんだ」

重箱に入つたおかずやおにぎりを見て、智樹が感嘆の声を上げる。かあるは戸惑つたように、頷いた。

「あ、まあ。そうだけど」

「かかる君はね。今年調理師免許を取るのよ。喫茶店で働いてるのもそのためなの。かかる君の料理は本当に美味しいのよ」

月乃が嬉しそうに、かあるを見ながら言った。智樹は眼鏡の奥の目を丸くしながら口を開く。

「へー。すごいな。すごいよ渡邊さん」

本氣で褒めている智樹に、今までずっと不機嫌そうな顔をしていたかおるの顔が笑顔になる。

「そう褒めるなよ、井沢。おまえ結構良い奴じゃん。で、眺めてないでさつさと食べようぜ。腹へつた」

かおるの言葉を合図に、和やかな雰囲気で食事が始まる。だが、藍子の胸中は複雑だった。笑顔で、振られた話には受け答えするが、頭が良く働かない。

ぼうっとしている間に、重箱の中身は殆ど空になっていた。

「あー食った、食った」

「かおる君」馳走様でした」

月乃がかおるに声をかける。かおるがそれに笑顔で頷く。そんな姿を見ていたれなくて、藍子は川へ視線を転じた。

ゆっくりとした流れの川は、さほど深くない。余り奥まで行かなければ、踝くらいの深さだ。

藍子はそう思つたと同時に口を開いた。

「私、ちょっと川に入つてくるわ」

そう言つて立ち上がつた。この場にいたくなかった。月乃と、かおるを見ていたくなかったのだ。

「えー？ 一人は危ないわよ。藍ちゃん」

「そうだよ。それに、まだ水は冷たいよ」

月乃と智樹がそう言つたが、そんな事はどうだつていいのだ。この場から離れたいだけなのだから。

「大丈夫よ。足をちょっとつけるだけだから」

そう言つて、藍子は三人に背を向ける。その背に声がかかつた。

「待てよ藍子。俺も行く」

その声に藍子は振り向いた。かおるが立ち上がりながらを見ている。

「あ、それが良いわ。かおる君、藍ちゃんのことお願いね」

「おう。まかせる。月乃、ちゃんと薬飲んどけよ」

そう月乃に言い残して、かおるがこちらに向かってきた。

「何で来ちゃうのよ」

小声で藍子が言つ。傍らを歩いていたかおるが、問い返す。

「え？ 今なんか言つた？」

「言つた。何で来ちゃうかな。彼女置いて」

そう言つと、かおるが顔を顰めた。

「お前だって、彼氏置いてくるじゃないか」

「あいつは彼氏じゃないって言つてるでしょう」

そう言つて藍子は足を速めた。

藍子とかおるが靴を脱いで、川へ入つていく姿を眺めながら、月

乃は笑顔を作つた。

「楽しそう……」

思わず月乃是そう呟いた。最初、川に入つて歩き回つていただけの、藍子とかおるだつたが、いつの間にか、水の掛け合いをしている。

「楽しそう」

またそう呟いていた。

「そう思うなら、月乃さんも行けばいいのに」

ふいに隣から声が聞こえ、月乃是驚いた。そういえば、今日は彼もいたのだ。いつも三人で行動していたから、つい忘れそうになっていた。

月乃是智樹に向かつて首を横に振り、視線を藍子たちがいる川へ向ける。

「いいの、私は。せっかく一人で楽しそうなんだもの。邪魔はしたくない」

視線の先では、藍子が業を煮やしたのか、かおるを突き飛ばした。かおるは尻餅をついている。

着替え持つて来ていないのに、大丈夫だろうか。そう思つてゐる
と、また、横から声が聞こえた。

「何か、月乃たち三人つて、妙な関係だよね」

その言葉に、月乃是智樹を見る。一体、何を言い出すのだろう。
智樹の顔に、いつもの笑顔が見られなかつた。月乃是、なぜか緊
張した。一体、どうしたというのだろう。

「妙つて？ それはどういう意味かしら」

月乃の問ひに、やはり笑顔を見せず、智樹は言つ。

「月乃是さんは、本当に渡邊さんのこと好きなの？」

その問ひに、月乃是目を見開いた。

「す、好きよ。当たり前じやない。じゃなかつたら、付き合つてな
んかない」

「そうかな。だつたら何で平氣なの？ 彼氏が、他の女の子とあん
な風に楽しそうにしてゐるのを見て。何で平氣なの」

そう言つて、智樹は視線を川の方へ向ける。かおるが、藍子を引
きずり倒そと、腕を引っ張つている姿が月乃是の目にも映る。藍子
が踏ん張つてそれに耐えている。

「それは、だつて、相手が藍ちゃんだから」

月乃是言いよどむ。智樹は間髪いれずに言つた。

「その方がよっぽど変だよ。藍子さんなら得に心配じやないか。幼
馴染で、ずっと一緒にいたんだろう？ あの一人は。自分から心変
わりしないかつて、彼女なら心配になるんじゃない普通」

「そんな心配、しないわよ」

「そうかな。少なくとも藍子さんは、どうみても、渡邊さんのこと
好きだよ」

その言葉に、月乃是息を飲む。智樹は続けた。

「それに、渡邊さんも……」

「やめてよ」

月乃是声を上げた。大きな声は、川へ入つてゐる一人にも届いた
ようだ。

だが、構いはしない。

「いい加減にして。あなたに、私の気持ちなんて分からぬわ」
そう言つて、月乃是立ち上ると、駆け出した。

遠く、藍子が自分を呼ぶ声が聞こえたが立ち止まらなかつた。
二人にあわせる顔が無い。

月乃是そのまま、一人駅へ向かつて走つた。

「ちょっと、アンタ月乃に何言つたのよ」

藍子は智樹に詰め寄つた。胸倉を掴んで揺さぶる。

「ちょ、ちょっと。藍子さん。待つて」

「何が待つてよ。月乃何で怒つてたのよ。あの子が怒るのなんて、滅多にないんだから」

「月乃の奴。薬、飲んでないじゃないか」

かあるが、敷物の上に転がつてゐる、白い粉薬の袋を見つけた。
「嘘……」

かあるの言葉に、藍子は智樹の胸倉を掴んでいた手を離して、か
あるを見る。

「ほら」

そう言つて、かあるが藍子の手に薬を乗せた。

その薬を握り締め、藍子はまた、智樹に視線を移した。

「どうしてくれるのでよ。あんたが月乃を怒らせたせいで、月乃死ん
じやうかも知れない。月乃が死んだらあんたのせいだから。どうし
てくれるのよ」

泣きそうな声で、藍子は言つ。智樹は、そんな藍子を見つめる。

「死ぬような病気じや、ないって……」

「発作が起きたら、それが大きな発作だつたら。月乃是痛みに耐え
かねて死ぬかも知れない。最初で言つたじやない。死んでしまう人
もいるつて」

その言葉にて、智樹は言葉を失くしたようになりを閉ざした。そんな

智樹に、なおもいいつのうとした藍子の肩を、かおるが掴んだ。

「やめひ、藍子。」いつを責めるより、月乃を捜す方が先だ。行こ

う

かおるが、藍子の手を掴む。引っ張られるよつて、藍子は走り出した。

走りながら、かおるが何かを思い出したよつて、振り返った。

「おい、井沢。おまえその辺のもの片付けて、ちゃんと持つてかえつて来いよな」

そういうと、今度は前を向いてかおるは足の動きを速めた。

6

さんざん探し回つたが、月乃是公園の近くにいなかつた。

一体どこへ行つたのだろう。

藍子は途方に暮れたように、溜息をついた。人の少ない電車の車内。振動に揺れる体。

イスに座つた藍子の手は、隣に座るかおるの手と繋がつてゐる。

あの時みたいだ。

藍子は、繋いだ手の感触に、昔の事を思い出した。

繋いだ手の温もり。

病院の待合室。

三人で初めて決行した冒険。

それがこんな事になるなんて。

藍子は泣いていた。

声を殺して泣いていた。

ここは病院だ。大声をだしてはいけない。今辛いのは、藍子ではなく、月乃なのだから。

そう思うが、涙は止まらなかつた。

月乃是星を見ている最中、発作を起こした。

月乃がスポットシンドロームという名の病気だとは、聞いていた。だが、それがどんな病気なのか。藍子は分かつていなかつたのだ。突然苦しみだした月乃に、藍子はどうしていいか分からなくなつた。

立つていられず倒れた月乃のそばにしゃがんで、月乃の名を呼ぶ。かかるが、誰か呼んでくると言つて走り出したのは分かつたが、藍子はしばらく呆然としていた。

『痛いよ、藍ちゃん』

痛みに呻く中、月乃がか細い声で言つた。

慌てて、藍子は月乃の手を取ろうとした。だが、その手が途中で止まる。

藍子は見てしまった。

月乃の首筋から、赤い発疹が顔へと広がつていくのを。急に嫌悪感が藍子を襲つた。

逃げ出したくなつた。

『月乃……私も。私も、誰か呼んでくるから』

そう言って藍子は走り出した。

怖かつたのだ。

ただ怖かつた。

月乃が変わつていく恐怖。自分の知らないものへ、変貌する姿。痛みに呻く月乃なんて知らない。そんな姿、知らなかつた。

藍子は耐えられなかつたのだ。

だから、月乃のもとから逃げ出した。

『「ごめんなさい。月乃。」』

泣きながら、藍子はここにいない月乃に向けて謝る。

月乃是今、処置室の中だ。

藍子はかおると二人、誰もいない、薄暗い待合室の椅子に座っている。

『一人にして、ごめんなさい。ごめんなさい』

かあるのいる場所へと向かうために走るさなか、藍子は確かに聞いていた。月乃が自分を呼ぶ声を。だが、藍子はそれを無視してしまった。

大人を呼んで月乃の元へ駆けつけた時、月乃是、意識がなかつた。顔の半分が赤い発疹に覆われていた。

死んでしまつたと思った。

後悔した。一人にしてしまつた事を。逃げ出してしまつた事を。

『大丈夫だよ。藍子。大丈夫』

藍子の隣から、声がかかる。かおるだ。藍子の手を握るかおるの手に、力がこめられた。

藍子は、涙目をかおるに向ける。

『月乃是大丈夫だよ。だから、泣くな』

真面目な顔で、かおるは、藍子の涙を指で拭う。

『でも、でも。わた、しがつ、冒険、行こうなんて言わなかつたら、こんなことに……』

『それは、俺も同じ。俺だって、月乃の病気がこんなすごいもんだと思ってなかつたもん。誰も、きっと月乃だつて思つてなかつたんだ。あいつ、抜けてるとこあるし』

『でも……』

藍子は反論しようとしたが、かおるの言葉がそれを遮った。

『だから、今度はこんなことにならないように、俺たちで月乃を守るんだ』

その言葉に、藍子は目を上げる。かおるの顔を見ると、かおるは無理やり作ったような笑顔を見せた。

『守るんだよ。月乃を。俺たちで』

『守る?』

『そつ。アイツが幸せになれるように。何があつても。アイツが辛くならないように。俺たちで月乃を守るんだ。……約束』

そう言つて、かおるが小指を藍子に突きだす。藍子はかおるの小指に自身の小指を絡めた。

暗く、静かな待合室に、指きりをする声が、響き渡つた。

「月乃、大丈夫かな。また前みたいに大きな発作起こしてたらどうしよう。月乃の近くにいなくちゃいけなかつたのに。どうして、月乃のそば、離れちゃつたんだろう」

藍子の目に涙が溜まる。かおるが藍子の頭を自身の胸に抱き寄せた。周りの乗客の視線から、藍子を守るように。

「お前が悪い訳じやないよ。それに、発作が起きるとは限らないじゃないか。最近は滅多に発作、起こそくなつただろう」「そうだけど……」

だが、それはいつも月乃が薬を飲んでいるからではないのか？藍子はそう思う。今、藍子が持つている薬。あれを飲まなければ、いつ、発作が起こつてもおかしくないのだ。

「あいつ、公園の周りにもいなし、家にも帰つてない。あと、月乃の行きそうな場所つて、心当たりないか」

かあるに問われ、藍子はかおるの胸から顔を離して、考え込む様に窓の外を見る。

月乃を捜しまわるうちに、夕方になつていた。

大きな太陽が、時々、家やビルの合間から現れては姿を隠す。もうすぐ日も沈む。

月乃是大丈夫なのだろうか。

冒険へ出たあの日。あの日の夕日もこんな風に真つ赤で、綺麗だ

つた。

そう思つた途端、藍子は声を上げた。

「そつだ、あそこは？ 私達が、初めて冒険した場所」

「高台公園？」

「そう。あの子、あんな事があつたあとも、良く星を見に行つてたじやない」

「行つてみる価値はあるか」

かあるはそつて頷いた。もうすぐ最寄の駅に着く。

藍子は祈つた。

どうかそこに、月乃がいますよつとい。

7

すつかり日は暮れた。高台公園の敷地の中、藍子とかおるは街灯を頼りに坂道を登つた。

もし、こゝに月乃がいなければどうじよつ。藍子には月乃がいそうな場所に、もう心当たりはなかつた。

坂を上つきて、ベンチのある場所へ向かつ。そのベンチからは、星も、自分達の住む町のネオンも良く見える。

「いた。月乃だ」

かあるが声を上げた。藍子の目にも映る。街灯の下。月乃がベンチに腰掛けている。顔を上に向け、星を眺めているよつだ。

「月乃！ あんた薬も飲まないで何やつてんの」

藍子が月乃に向かつて、叫ぶよつてよつ。

月乃がその声に振り返つた。

そして、立ち上がり、口を開く。

「来ないで」

今にも走り出さうとしていた藍子とかおるは、その声に立ち止ま

る。

「月乃？」

街灯の下。藍子達には月乃の表情が良く見えた。いつも、幸せそうに微笑んでいる月乃とは違う。どこか、苦しそうに歪んだ表情をしている。

「月乃、お前、まさか発作起きたんじゃないや」

かあるが声をかけるが、月乃是首を横に振った。

「違う。薬は飲んでるし、発作を起こしたわけじゃないわ」

月乃の言葉に、藍子は力が抜けそうになるのを感じた。良かつた。薬、飲んでいたのか。月乃是元気そうだ。言っていることは嘘ではないだろう。そう思い、藍子は少し安堵した。

「……じゃあ、どうしたっていつのよ。何で近づいちゃいけないの。月乃、何があったのよ」

藍子が問う。月乃是一度顔を俯けて、意を決したように、また顔を上げた。

「私、かあるくんと藍ちゃんが、お互に好きなこと知つてた」

月乃の唐突な言葉に、一瞬意味を理解しきれなかつた二人は、ほぼ同時に慌てふためいたように声を上げた。

「こんな奴、誰が好きになるかー」

互いに、指さして言つ藍子とかあるに、月乃是首を横に振つてみせる。

「隠さなくともいい。二人とも、私を何だと思つてるの？　ずっと、一緒にいたのよ。一人の気持ちぐらう、とつこの昔に氣づいてたわ」「気づいていた？」

月乃は何を言い出したのだらう。一体、月乃是どちらしたいといつのだらう。

「分かつた。月乃、智樹に何か言われたんでしょう。だから、急にそんなこと……」

月乃がこんなことを言い出した原因は十中八九智樹だ。きっと、アイツがよからぬ事を月乃に吹き込んだに違いない。藍子はそう思

つて、ここにはいない智樹を呪つた。

「違う。そうじゃない、そうじゃないの」

月乃是、藍子の言葉に首を大きく横に振つてみせる。

「じゃあ、一体、どうしてお前そんなこと言い出したんだよ。分かるよう説明してくれ」

かあるが、月乃に説明を求める。月乃是口を開いた。

「絶えられなくなつたのよ。無理だつた。我慢しようと思つたけど、出来なかつた。……私達の今の関係はおかしいわ」

月乃の言葉に、藍子と智樹は一瞬目を見交わす。三人が三人とも同じ事を思つていたのかもしれない。そのことに気づいたのだ。

「どうしてなの？　どうして、かある君は私を振つてくれなかつたの？」

かあるは困惑したような声をだす。

「月乃、何言つて……」

月乃是叩きつけるように、かあるの言葉を遮つた。

「さつきも言つたでしょ？　私は、一人がお互いに好きだつて知つてた。だから、あのお花見の口。振られるつもりでかある君に告白したのよ。なのに何でオーケーするの？　どうして、藍ちゃんは私を後押しするような事言つの。私のこと、可哀相だとでも思つたの？」

「それは違う」

藍子は、叫んだ。月乃と藍子は互いに見つめ合つ。

「何が違うの？」

月乃が珍しく大声をあげた。藍子は胸に手を当てて、正直な気持ちを言葉にだした。

「私は、ただ月乃を守りたかつただけ。月乃が幸せになるように、ずっと守つていこうつてかあると約束したから。だから……」

藍子はそこで、言葉を切つた。月乃が街灯の下で、冷たく微笑んだのを見て、つい口を噤んでしまつた。

「だから、自分の気持ちを押し殺してまで、私にかある君を譲つた

の？ 藍ちゃん。私はもつ子でもじゃない。私を守るなんて、そんなの藍ちゃんのただの自己満足じゃない」

その言葉に、藍子は息を飲む。

自己満足？ そうなのかもしない。月乃のため、それだけを思つてずっと耐え忍んでいるつもりだった。過去の自分の罪を、勝手に償つているつもりでいた。

それは、間違いだつたのだろうか？

「月乃、やめろよ。俺たちはそんなつもりじゃなかつたんだ」

「嘘よ。私はね、かかる君。二人の事、本当に親友だと思ってた。何でも話し合える親友だと。なのに、一人はいつも肝心な事を私に言つてくれない。私がかかる君に好きつて言つた時、私は一人の素直な気持ちが聞きたかった。それなのに、一人して嘘付いて。私を騙そうとして。それが、辛くて悲しかつた」

月乃是顔を俯けた。泣いているかもしない。藍子がそう思つたとき、月乃是俯いたまま、言つた。

「でも最初は、それでもいいかつて思った。藍ちゃんとかある君が付き合えば、私と一緒にいてくれる時間が減ると思つていたから。私が、かかる君と付き合つことになれば、藍ちゃんもきっと、私と離れずに一緒にしてくれる。そうすれば、ずっと三人で一緒にいるつてくれるって」

月乃是そこで、一度言葉を切つた。ゆるい風が、ゆっくりと三人の間を吹きぬける。

「私はただ、三人で一緒にいたいだけだったのに。なのに、一人して、私といふと辛そうな顔する……私から離れようとする。私を受け入れてくれたんじゃなかつたの？ なのにどうして私から離れていくこうとするの？」

言いながら、月乃是両手を握り締めていた。それだけ、力のこもつた声だつた。

知らなかつた。月乃がこんな風に思つていたなんて。ずっと、藍子は自分が耐えているつもりでいた。

だが、それは間違いだったのかもしれない。

「月乃……」

藍子が、月乃を呼ぶ。

月乃是顔を上げた。一時、言葉がやんだ。

「ごめんなさい……。二人のこと責めたけど、一番酷いのは私よね。井沢さんに三人の関係はおかしい、本当にかかる君のこと好きなのかつて聞かれて、自分の本当の気持ちが分からなくなつた。私のかかる君への思いは本当に恋なのか、友情なのか分からなくて、逃げ出したの。一人にあわせる顔がないと思って、なのに、二人の顔みたら、急に腹が立ってきて、二人にハツ当たりしちゃつた。……ごめんなさい。私には一人を責める資格なんてないのに」

月乃が口を閉ざした。

公園の木々の、葉擦れの音が、耳を打つ。

突然、かあるが動いた。かあるは月乃のもとへ走った。

月乃是驚いた様に後ずさりとしたが、それより早く、かあるは月乃の腕を掴んで、自分のもとへ引き寄せた。

「ごめん、月乃。」「めんな

かあるは、月乃を抱きしめながらそつ口にした。

「離してよ、かある君

「いいから聞けよ」

かあるは、月乃を抱きしめたまま声を上げた。

月乃是、かあるの胸から抜け出そうともがいていた動きを止めて、かあるを見上げる。

「月乃、ごめん。俺、藍子が好きなんだ。ごめん。」「めんな。ずっと、黙つてごめん。お前を裏切るようなことして悪かつた。お前のことも好きだけど、それは恋愛じゃないんだ……」

月乃の目に、うつすらと涙が浮かぶ。月乃是、かあるを抱きしめ返した。

「うん。分かつてたよ。だから、別れてあげる。……それと、ごめんなさい。二人のこと分かつてて、告白なんかするんじゃなかつた。

「一人のこと困らせてるつて分かつてたのに、ずっと後悔したのに、言いだせなくてごめんなさい」

「月乃」

「でも、かおる君。告白する相手、間違ってるわよ」

そう言つて月乃是、かおるから身体を離した。

今度は、かおるも月乃の動きを遮る事はない。

月乃是、目元に溜まった涙を拭うと、かおるの横から顔をだし、後方でじっと固まつたように動かない藍子を見る。

「藍ちゃん。藍ちゃんはどうなの？ ちゃんと、本当のこと聞かせて」

月乃がそう言つと、藍子は我に返つたように一度瞬きをした。そして、泣きそうな顔で、口を開く。

「月乃、ごめんなさい。私、私も……」

そこまで言つて、藍子は言葉を詰まらせた。月乃と、かおるはじつと藍子の様子を見る。藍子は、意を決したように、口を開いた。

「私も、かおるがずっと好きだった。でも私、月乃を裏切るつもりなんてなかつたの。私、月乃を失うのが怖かった。月乃が幸せならそれでいいと思つた。かおるを諦める事が、月乃への罪滅ぼしになると思つたの」

「罪滅ぼし？」

訝しげな声を上げた月乃に、藍子は言つ。

「月乃が、この場所で発作を起こした時、私逃げたでしょ？ だから、ずっと、それ、後悔してて。月乃是私の名前呼んでくれたのに、私、それも無視して逃げちゃつて」

藍子の言葉に、月乃是首を傾げる。

「でもあれは逃げたんじゃなくて、人を呼びに行つてくれたんだじょう？」

月乃の言葉が胸に突き刺さる。藍子は胸元の服を掴んで、今までずっとと言えなかつた思いを口にした。

「違う、違うの。あの時、ただ怖くて、嘘付いて月乃のもとから逃

げ出したの」

月乃の反応を見るのが怖かつた。藍子は、視線を地面へと落とし、月乃が非難の声をあげるのを待つた。

「藍ちゃんたら。そんなこと、気にしなくて良かつたのに」「え？」

藍子は顔を上げた。月乃を見ると、月乃是泣き笑いの顔で、藍子を見つめている。

「そんなこと、気にしなくて良かつたのについて言つたの。子どもだつたの、お互いに。急に発作を起こした私を見て、怖くなるのなんて当たり前じゃない。それに、病院に着くまでずっと、私の手、握つてくれたでしよう？ 私は、感謝こそすれ、藍ちゃんを恨む気持ちなんてちつともなかつたのに」

藍子の顔が歪んだ。藍子の頬に涙が伝つ。藍子は、かおると月乃のもとへ向かつて走つた。

かおるが、藍子を抱きとめようと腕を広げたのが分かつた。だが、藍子はかおるの横をすり抜けて、月乃に抱きついた。

後ろで、あれ？ などというかおるの声が聞こえたが、気にしない。

藍子は月乃を抱きしめたまま、言った。

「ごめんね月乃。私、月乃のこと好き。大好き」

「うん。私も大好き。ごめんね、藍ちゃん」

一人して、抱き合つて、泣き出した。そんな二人を、かおるはしばらく呆れたように見ていた。その後、ゆっくりと一人に近づく。

「おい、俺を忘れんな」

そう言つて、かおるは抱き合つている二人を包み込むよつこ、腕をまわした。

夜の公園で、抱き合つたまま大泣きしてから、一週間が過ぎた。

藍子は、喫茶店のカウンター内で、カップを拭いていた。
かおるは厨房で、マスターと一緒にナポリタンを作っているはずだ。

藍子はそう思いながら、目の前の席に座っている一人の客を嫌そ
うな顔で見た。

「どうして、あんた達二人がくつつくかな」

藍子は、ぼそりとそう漏らす。

それを聞きつけた一人の客のうち一人が、声を上げた。

「いやだなー、藍子さん。気の合う男女が惹かれ合つ。それは自然
の摺理つてもんだよ。ねー、月乃さん」

「ねー、智樹君」

ねー、じゃないでしょ。と、藍子は思うのだった。眉間に皺を寄
せ、藍子は前に座る二人の客を見る。月乃と智樹。この二人はどう
やら、付き合い始めたようなのだ。

一体どういう経緯でそういうことになつたのか。それはまだ聞い
ていないが、これから聞き出すつもりだ。

昼のピークが過ぎれば、バイトも終わる。かおると二人、月乃と
智樹の馴れ初めについて聞くのも悪くないだろう。

そう藍子は思つのだった。

「藍子」

呼ばれて振り向いた先に、かおるの姿があった。かおるの手には
ナポリタンの乗った皿が二つ。

藍子は自然と笑みを浮かべ、かおるのもとへ向かう。
かおるから、ナポリタンを受け取るために。

トライアングル ライン（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございました。

この作品は針井龍郎先生発案のシャツフル企画に参加させていただきました作品です。柚木なぎさ先生のキャラクター原案をもとに書きました。

今回は初の企画モノ参加となりました。針井先生、素敵な企画をありがとうございました。

そして、投稿モノとしては私初の恋愛ジャンルとなりました。いかがでしたでしょうか。

恋愛モノは普段できるだけ避けて通るのですが、（はずかしいので）せっかくの企画モノだし普段とは違うお話を書いてみようといつこうで、こんな感じになりました。

ちゃんと恋愛モノになつていれば良いのですが（汗）
今回とても楽しく書く事が出来ました。柚木先生ありがとうございました。柚木先生のキャラクターを上手く表現できていれば良いのですが。こんなですみません。でも、本当に楽しんで書くことができました。

最後になりましたが、某交流サイト様で、大学について教えてくださいとのスレにお答えくださつた心優しき皆様。本当にありがとうございました。皆様のお蔭で、この小説は完成いたしました。せつかく色々と教えていただいたのに、殆ど大学でのシーンがなかつたことをこの場をお借りしてお詫びをせります。そして、ありがとうございました。

次話はキャラクター原案です。柚木先生に頂いたメッセージを「アピ

べさせていただきました。

それでは、ここまで読んで下さった皆様ありがとうございました。
次の後書きでは、キャラクターからどのように話を膨らませたかを
書くつかと思っていますので、「興味のある方は」ご覧下さいませ。

キャラクター原案

* * * キャラクター原案です。こちらは柚木なぎさ先生に頂いたメソセージの中から、キャラクター原案の部分を抜粋し、コピペさせていただきました。柚木先生。とっても素敵なキャラクターをありがとうございました。本当に楽しく書かせていただきました。すこしでもお気に召していただけると良いのですが * * *

登場人物

三人はとりあえず幼馴染みみたいな関係……。

容姿の部分は髪型だけを決めましたので、あとは愛田さんの想像にお任せします。

海野藍子【】

年齢：22歳、大学生。月乃と同じ大学に通う。（薬学部）

容姿：長髪、黒。

性格：気分屋

備考：過去に重い影あり。（そこは想像にお任せします）

柴崎月乃【】

年齢：22歳、大学生。藍子と同じ大学に通う。（医学部）

容姿：セミロング、茶。

性格：誰にでも公平に優しい。

備考：不治の病にかかっている。（ここも想像にお任せです）

渡邊かおる【】

年齢：22歳、フリーター。

容姿：短髪。（色は愛田さんの好きな色で）

性格：普段はお調子者。

備考：藍子のことが好きだか、病氣の月乃に迫られて、仕方なく付き合ひ。

ほかにも愛田さんで考えた登場人物をどんどん出してくれてかまいません。この幼馴染み三人を軸に、世界を広げてください。あと、藍子とかおるは同じところでバイトをしているという設定でお願いします。バイト先はどんなところでもオッケーです。愛田さんの書きやすい場所で結構ですよ。

キャラクター原案（後書き）

まず最初に、針井先生。このよつな素晴らしい企画を発案いただき、また、参加させていただきありがとうございました。非常に楽しかったと同時に、色々と勉強させていただきました。また、このような企画がありましたらぜひ参加させてください。

そして、柚木先生。

頂いたキャラクター。こんな感じになりましたががでしたでしょうか。藍子ちゃんは最初の一言のお蔭で、こんなキャラになってしましました（笑）

月乃の誰にでも公平に優しい感じがだせなかつたのと、かおるのお調子者な感じが出せなかつたのが心残りです。すみません。少しでもお気に召していただけると良いのですが……。

では、前の後書きで書いた様に、いただいたキャラクターを元にどのように話を膨らませたかを書いてみよつかと思います。“ご興味のない方は、ここでお別れいたしましょう。ここまで読んでいただきありがとうございました。”

あ、“ご興味がおありますか？”では、書いてみよつと思ひます。

原案を頂いてすぐに思つたこと。大学生だ！ でした（笑）家庭の事情で大学行けなかつたのでちょっと焦りました。でも、某交流サイト様で色々と興味深い事を教わり、“ここはまあ、クリア”ということ。（教えてくださつた方々本当にありがとうございました。）

代返のことを色々教えていただいちゃいました。面白かったです（

次に、思ったこと。

過去に重い影！？ 例えば、藍子ちゃんが昔ピーされたりとか！？ ピーしちゃったとか！？ 色々ここではかけないようなことを考えてしましましたが、どれも没。とりあえず横に置いておきました。

次。え？ 月乃ちゃんって、不知の病？ 心臓病とか？ と色々考えてみましたが、医学生なんですよね。月乃ちゃん。医学生って体力ないともたないんじゃないの？（私の勝手な偏見）じゃあ、すぐ死ぬような病気、体力がないような病気じゃダメじゃないか。感染するようなものもダメよね……。でも、ある程度生死にかかるような病気じゃないとかあるは月乃に迫られて付き合つたりしないよなあ……。

ということで、自分で作りました。病気。「スポットシンドローム」なんて病気は実在しません。もし仮に同じ名前の病気があったとしても、私が書いたような病気ではないでしょう。これは、ケータイに入っていた和英辞書で、痣を調べてスポットという単語があったので、一番憶えやすいと言つことで採用しました。

そして、藍子ちゃんの重い過去も月乃関係にしようと思いつきました。

で、ストーリーですが、これは、せっかく柚木先生がかおるが『藍子が好きだけど月乃に迫られて仕方なく付き合つ』と書いて下さっているので、三角関係モノにしようと思いました。

サスペンス系でもいけるかなと思ったのですが、この前まで連載していたものが推理系のお話だったので、ここはいつそ普段避けて通る恋愛モノにしようと意気込みました。（サスペンス系でしたら、きっと月乃はかなり嫌な奴になっていたでしょう。そして藍子かか

おるに殺させる。わー怖いですね）

そして、この三人だけでは上手く話しが転がらないだらうといつことで、三人の関係を引っ搔き回してくれる智樹を登場させてみた。（最初はこんな変人じやなかつたんですけど）

と、このような感じで、お話を作つていきました。一応大まかな流れを決めて、あとは、指が動くまま、思いつくまま書きました。

話しは変わりますが、今回は初めて、タイトルに意味を持たせてみました。今まで、超テキトーにタイトルを決めていたので（苦笑）

今回のタイトル『トライアングル ライン』

意味は、三人の関係です。最初、彼らの関係はトライアングル……月乃を頂点に三角形の形をしていました。その関係から、三人が一つの平面上に立てるようになりましたよ。という意味で、ライン＝線と。英語が苦手なので、本当は三角形から線になりましたよという意味の英語にしたかったんですが、何々～何々の『～』の部分の英単語が浮かばず、にしてしまいました（汗）誰か分かる方教えてください（泣）

本当に楽しく書かせていただきました。

後書きの方が長くなつていいよつたな。まあ、気にしないで下さい。
それでは、ここまで読んでいただきありがとうございました。心より感謝を込めて。

愛田 美月でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0014e/>

トライアングル ライン

2010年10月8日15時34分発行